

みずかきジェマイマの はなし



ベアトリクス・ポッター さく・え

おおくぼ ゆう やく

みずかきジェマイマのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え
おおくぼゆう やく

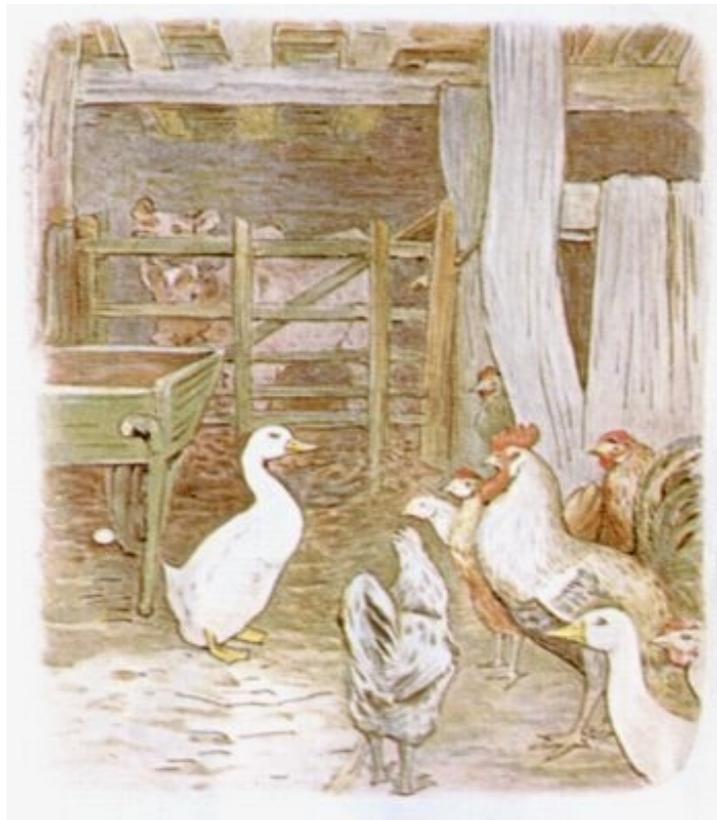


ラルフと ベッツィに おくる まきばの はなし

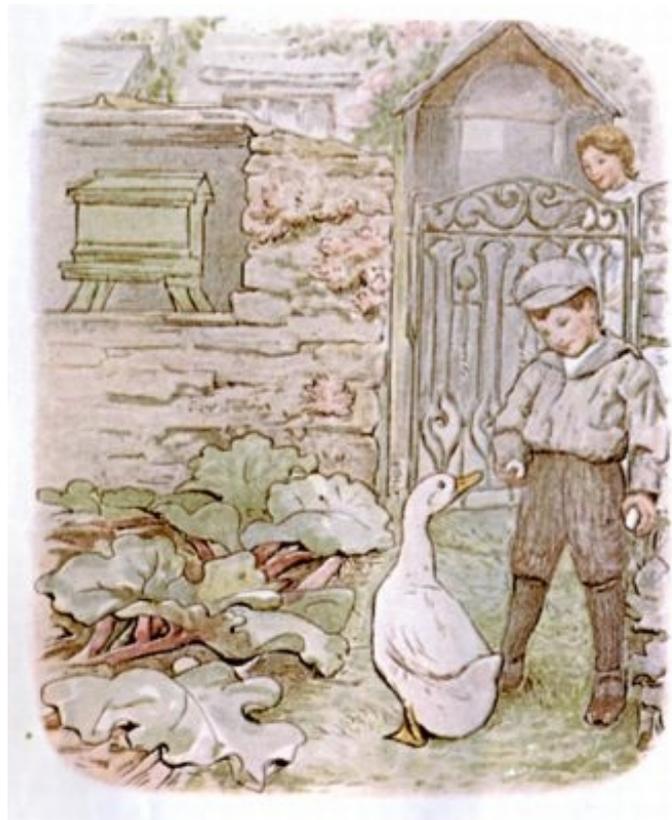


ほんと おかしな えづらですよ。 ほら、 あひるのこが めんどりと いっしょに いるんですよ！

—— いまから はなすのは、 みずかきジェマイマの ものがたり。 このあひるさん、 まきばの おくさんが じぶんに たまごを かえさせてくれないと、 なやんでおりました。



だんなの おねえさんの みずかきりベカは、 たまごを あたためるにしても
はじめから だれかに まかせっぱなしで ——「わたし こらえしょうが ない
から、 28にちも たまごのうえに すわりきりだなんて むり。 そうでしょ、
ジェマイマ。 あんた いつも さましちゃうじゃない、 ほら！」
「ほんとは たまご かえしたいんだけど。 みんな じぶんで かえしたいんだ
けど。」と みずかきジェマイマは がーがー。



じぶんの たまごを かくしてもみました。 ところが いつも みつかって とりあげられるのです。

もう やけになった みずかきジェマイマは いっそのこと まきばから とおく はなれたところで うむことに しまして。



まきばを あとにしたのは、 はれた はるのひの ひるさがり、 おかの むこ
うまで つづく いなかみちを すすみませす。

よそいきの かたかけと おぼうしを みにつけて。



おかの てっぺんに つくと、 とおくに もりが みえてきました。
そこで ふと おもいます、 あそこなら しずかで おちつけそうだ、 と。



みずかきジェマイマは あまり とびなれては なかったのですが、 かたかけを
なびかせながら おかを すこしばかり かけおり、 そらへ むかって とびた
ちました。



とびだしが うまくいくと、 かぜにも きれいに のれて。
うしろへ ながれていく きぎを しりめに、 やがて もりの まんなかあたり
ひらけたところが みえてきます。そこは きりひらかれて、 きも やぶも
ありません。



ジェマイマは こころもち もたもたと おりたつと、 そのあとは うむのに
ちょうどいい からっとしたところを さがして あたりを よちよち。 せのた
かい キツネノテブクロを みつけると このあたりの きりかぶは どうかなと
おもいまして。

ところが —— きりかぶは おさきに とられていまして、 びっくりしたの
なんの、 みると みなりのいい とのがたが しんぶんを よんでいたのです。

くろの とんがり おみみに、 すないろの おひげ。

「がー？」と みずかきジェマイマは あたまと おぼうしを かしげます

——「がー？」



とのがたは しんぶんから めを あげると、 くにいるように ジェマイマを
みつめまして ——

「おくさん、 まいごですか？」と そういう ののがたは おしりのしたに ふ
さふさの ながい しっぽを しいておりまして。 きりかぶが そこそこ しめっ
ていたのです。

ジェマイマには、 すこぶる ぎょうぎよく ひんのある ひとだと おもえま
して。 じぶんは まいごなのでは なく、 たまごを かえずに ちょうどいい
からっとしたところを さがしに きているのだと、 わけを はなしました。



「ああ！ そうでしたか、 なるほど！」と すないろ おひげの とのがたが く
いいるように ジェマイマを みつめます。 しんぶんを たたんで、 うしろすそ
にある ポケットへ しまいました。

ジェマイマが めんどりは じゃまものだと ぐちを いいますと、
「なるほど！ それは それは！ そのにわとりとやらに おあいしたいものです。
ひとつ そやつに みのほどを おもいしらせて やりましょうぞ！」



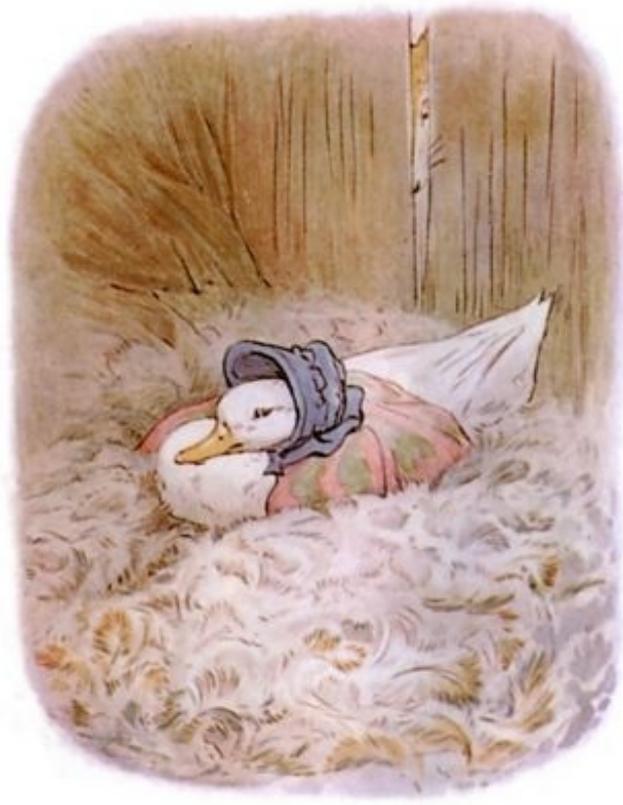
「ときに たまごを かえすところですが ー わけも ありません。 うちの まきごやには はねが やまと あります。 もちろん おくさま、 じゃまなんて はいりませんよ。 どうぞ おすきなだけ そこに おすわりになって かまわないのです。」と ふわふわ ながい しっぽの とのがたが いいます。

つれてこられたのは、 キツネノテブクロが たくさん はえた おくの おくにある いっけんの わびごやでした。

そだと しばつちで できていて、 こわれた バケツが ふたつ、 えんとつが わりに たてに かさねられています。



「こちらは なつの ベっそうでして、 うちの あなぐら —— いや、 ふゆの
いえでは —— ぐあいが わるいでしょうから。」と ぬかりない とのがた。
なんと そのこやの うらてに、 もうひとつ ふるい きばこで つくられた
あばらやが ありまして。 とのがたは ドアを あけて、 そこへ ジェマイマを
とおします。



あばらやじゅうに はねの けが ぎっしり つまっておりますて —— それはもう いきが つまりそうなくらいに。ところが そのぶん とっても ふかふかで きもちよく。

みずかきジェマイマは こんなに どっさりの はねを まのあたりにして、ちょっと びっくりしました。けれども きもちいいので、まったく てまどることなく、 たまごが うめまして。



そとに かおを だすと、 すないろひげの とのがたは まるたに こしかけて しんぶんを よんでいると いますか —— すくなくとも ひろげては いた のですが、 まなざしは しんぶんごしに ありまして。

きくばりの ひとなので、 ジェマイマが よるは かえることになる と いますと、 きもちを こちらへ よせてくれた ようで。 あくるひ おこしになるまで しっかり みはっておくと やくそくしました。

たまごと あひるのこが だいすきだとの ことで、 うちの まきごやで きもちよく たまごを うんでもらえるなんて よろこばしいかぎりだと 言ってくれまして。



みずかきジェマイマは まいにち ひるすぎに やってきまして。 ぜんぶで 9 つ たまごを うみました。 いろは みどりっぽい しろで、 たいへん おおきなものです。 きつねの とのがたは これでもかと みとれまして。 ジェマイマの いないすきに なんども ひっくりかえしては かぞえあげるのです。

やがて ジェマイマは ついに あくるひから あたためだす ころろづもりだと つたえまして ——「で、 コムギを ひとふくろ もってくる つもり。 だって たまごが かえるまで そのばを うごいちゃ いけませんし。 ひえちゃうと あれですし。」と まめな ジェマイマ。



「おくさま、 わざわざ ふくろを おもちいただかなくて けっこうですよ。 オートムギを さしあげます。 それどころか ながながとした おあたためを とりかかるに さきだちまして、 ごちそうを おだしする ころろづもりで。 さあ ふたりきりの ディナーパーティを いたしましょう！」

それでは まきばの おにわから ハーブを つんできて いただいても よろしいですか？ シソオムレツをつくるのです。 セージや タイム、 ミントに タマネギ2つ、 あと パセリ しょうしょう。 わたくしは つめもの ー いや オムレツに つかう ラードを てにいれますので。」と すないろひげの とのがたは てぬかり ありません。



みずかきジェマイマは にぶい ひとでしたから、 セージと タマネギと いわ
れても まだ おかしいとも おもわなくて。

まきばの おにわを まわりながら、 あひるの まるやきの つめものにつ
かう、 さまざまな ハーブを ちょっとずつ くわえとっていきました。



そして よちよち だいどころに はいって行って、 かごから タマネギを 2 つ とります。

でようとする、 ちょうど コリーいぬの ケップに でくわしまして。「その タマネギ どうするんだい？ いつも ひるすぎると ひとりで どこへ いったるんだい、 みずかきジェマイマ？」

ジェマイマは どちらかという、 そのコリーいぬが にがてでしたので、 これまでの いきさつを ぜんぶ はなしてしまいます。

コリーいぬは さえた そのあたまを かたむけながら、 はなしに ききいりました。 このいぬが にやりとしたのは、 ちょうど ぎょうぎのいい すないろひげの とのがたが はなしに でてきたところで。



あと いくつか きかれたのが、 もりのことと、 そのこやと あばらやが いったい どこに あるか。

そのあと コリーいぬは そとへ でまして。 むらを かけあしに まわって、 2ひきいる きつねがりの こいぬを さがしますと、 にくやの とぐちのまえで みつかりました。



みずかきジェマイマは、ひざし あふれる ひるさがり、さいごの いなかみ
ちを すすんでいきます。ハーブの たばと タマネギ2つのはいった ふくろ
は ちょっとした おおにもつで。



とのがたは まるたに こしかけて、 くんくんしながら もりのあたりを うわのそらで ながめていました。 ジェマイマが おりたつと、 とのがたは さっと たちあがりまして。

「たまごを かくにんしたら すぐに こやのほうへ。 オムレツに つかう ハーブを こちらに。 ほら さっさと！」

とのがたは どうも ぶっきらぼうで。 みずかきジェマイマに してみれば、 こんな しゃべりかた いつもとは ちがって はじめてなわけで。

びっくりするとともに、 こころが ざわざわしてきました。



なかに おりますと、 あばらやの うらあたりから どたばた あしおとが き
こえてきまして。 黒い おはなの だれかが ドアのしたから くんくん やっ
ていて、 するうち ドアに かぎが かけられまして。

さすがに あわてだす ジェマイマ。



それから まもなく ものすごい ものおとが して ー わんわん、 わお
ーん、 ぐるるるる、 おおーん、 きーっ、 うぎゃっ。

これよりあと ひげを はやした きつねの とのがたも、 すがたが みえな
くなったわけで。

いそいで ケップは あばらやの ドアを あけて、 みずかきジェマイマを そ
とへ だしてやります。

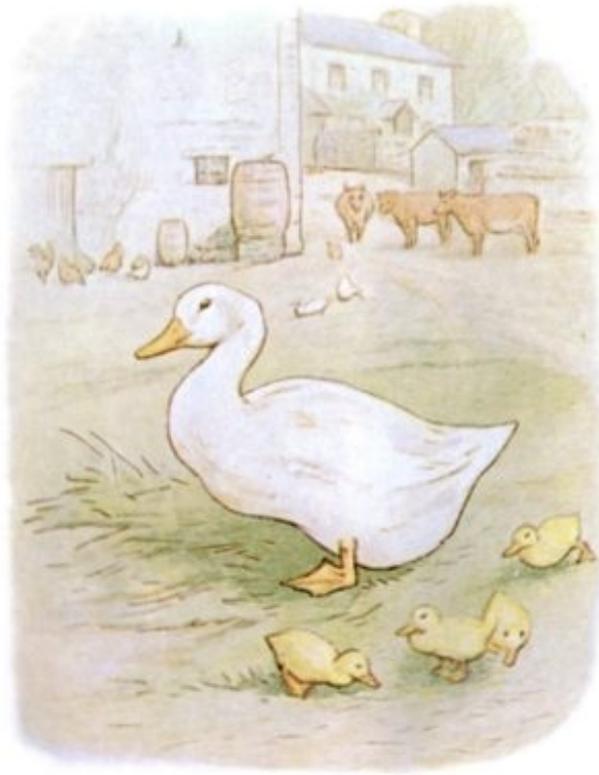


ところが 木の わるいことに、 こいぬたちが とめるよりもさきに とびこ
んで、 たまごを みんな たべつくしてしまつて。

コリーいぬは みみを かまれていて、 こいぬたちは どちらも へろへろ。



みずかきジェマイマは たまごのために なみだしながら、 うちに つれかえられたのでした。



6がつには また いくつか たまごを うみまして、 こんどは じぶんの そばに おいていいことになつたのですが、 そのうち かへつたのは 4つだけで して。

みずかきジェマイマによると、 そのとき きが はっていた せいだ、 とのことですが、 じつは そもそも このかた たまごを あたためるの うまくないの ですよね。

(おしまい)

Original Text: *The Tale of Jemima Puddle-Duck* (1908)

Original Author: Beatrix Potter (1866-1943)

みずかきジェマイマのはなし

<http://p.booklog.jp/book/34826>

著者：ベアトリクス・ポッター

訳者：大久保ゆう

発行：Alz

発行元情報：<http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。
上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に利用・複製・再配布することができます。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34826>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34826>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.